

「イエシュアの十字架（1）」

マルコの福音書 15:16~21

はじめに

イエシュアの十字架の受難がいよいよ本格化していく箇所に入ります。イザヤが預言した「人が顔を背けるほど蔑まれ（イザヤ書 53:3）」とはまさにここから、という箇所です。しかし決して顔を背けることなく、しっかりと目をとめてまいりましょう。なぜならここにも神のご計画が、神の国の福音が表されている、秘められているからです。つまりここで顔を背けることはすなわち、神のご計画から目を背けることとなります。ですから今日の箇所もしっかりと目をとめつつ、御国を求めつつ読み進んでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

1. 紫の衣と茨の冠

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:16 兵士たちは、イエスを中庭に、すなわち、総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。

15:17 そして、イエスに紫の衣を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、

15:18 それから、「ユダヤ人の王様、万歳」と叫んで敬礼し始めた。

イエシュアに「紫の衣」が着せられました。紫は当時希少で高価な染料で染められていたため、王や貴族、金持ちなどが身に着ける物でした。ユダヤ人の王と呼ばれながらも、そのユダヤ人たちから死刑を求刑されるという、見た目にはなんとも皮肉な、無様でなさけない状況にあるイエシュアをあざ笑い、これを馬鹿にして、兵士たちがこのようなことをしたと思われそうですが、この出来事にも重要な意味が秘められているのです。

民数記【新改訳 2017】

4:1 【主】はモーセとアロンに告げられた。

4:5 宿営が出発するときは…

4:13 祭壇から灰を除き、紫色の布をその上に広げる。

モーセの幕屋の庭に置かれた、いけにえの血を注ぎ、また焼くための「祭壇」、これが持ち運ばれる際に着せられたものが同じく「紫色の布」すなわち「紫の衣」でした。神への捧げ物はすべて、人の好き勝手にどのように捧げても良いものではなく、幕屋や神殿、あるいは神がお定めになった山など、場所は様々でしたが、必ずそこには「祭壇」が築かれ、それによって捧げられました。つまりこの時のイエシュアの御体が、モーセの幕屋のそれと等しい、神の御前に正当ないけにえの「祭壇」であるということが表されているのです。ですからイエシュアに「紫の衣」が着せられたというこの出来事は、ローマ兵たちの単なる戯れではありません。「紫の衣」を着せられたイエシュアが連れ出されて行くこの様子には、「祭壇」の移動、運搬についての、神がお命じになられた上記の規定が執り行われているのです。つまり兵士たちによってイエシュアに着せられた「紫の衣」、この様子には、「軍勢を率いて神の祭壇が行く（来る）」とい

う意味が、神のご計画が表されているのです。ではこの「祭壇」とは一体何でしょうか。最も明解にイエシュアご自身がこうっておられます。

マタイの福音書【新改訳 2017】

23:19 目の見えない者たち。ささげ物と、そのささげ物を聖なるものにする祭壇と、どちらが重要なのか。

神への「ささげ物を聖なるものにする」もの、火によって汚れをきよめ、純化し、神のものとして相応しく造り変えるもの、それが「祭壇」です。イエシュアこそがまさにそれを成されるただ一人の御方です。やがてイエシュアはまさに天の軍勢の「全部隊を呼び集め」、これを率いて地上に再臨されます。その目的はイスラエルの残りの者たちを「聖なるものにする」ため、神の所有の民とするためです。それゆえ天の軍勢を率いて神の祭壇、イエシュアは来られるのです。ではそれはいつ、どのような時なのでしょう。それが次に示されています。

イエシュアの頭に「茨の冠」がかぶせられました。「茨」は罪のゆえにこの地が呪われたことの象徴です（創世記 3:17~18）。そしてここに「冠をかぶせる、囲む」という意味のアータル(אֶטָר)というヘブル語が使われており、その最初の言及は以下の出来事です。

サムエル記 I【新改訳 2017】

23:26 サウルは山の一方の側を進み、ダビデとその部下は山のもう一方の側を進んだ。ダビデは急いでサウルから逃れようとした。サウルとその部下が、ダビデとその部下を捕らえようと迫って来たとき、

23:27 一人の使者がサウルのもとに来て、「急いで来てください。ペリシテ人がこの国に襲いかかって来ました」と言った。

23:28 サウルはダビデを追うのをやめて帰り、ペリシテ人の方に向かった。こういうわけで、この場所は「仕切りの岩山」と呼ばれた。

これはダビデの命を狙うサウルと、逃げるダビデの追走劇ですが、ここでサウルがダビデを「捕らえようと迫って来た」という箇所に聖書で最初のアータルが使われています。敵に囲まれた、絶体絶命の大ピンチ、それがアータルの本来の意味が指し示す状況です。イスラエルの残りの者たちが、このような状況に追い込まれるその時、彼らを「聖なるものにする」「祭壇」としてイエシュアは来られるのです。終わりの時代に現れる獣、反キリストの「型」が、ここではダビデを追うサウルの姿に表されています。その反キリストの手からイスラエルを救い出す、まさに「仕切りの岩山」となってイスラエルの民をその敵から引き離す、分ける、まさに「聖別」するためにイエシュアは地上再臨されます。このような神のご計画がイエシュアの「紫の衣」と「茨の冠」についての描写には秘められており、決してイエシュアのただの痛々しい場面ではなく、皮肉や嘲りによってではなく、真の意味でイエシュアが「ユダヤ人の王様、万歳」と叫ばれるための神のご計画がここには表されているのです。

2. 葦の棒と唾

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:19 また、葦の棒でイエスの頭をたたき、唾をかけ、ひざまずいて拝んだ。

また「葦の棒」カーネ(קֶרֶן)について、この言葉の最初の言及は創世記 41:5 です。

創世記【新改訳 2017】

41:5 彼はまた眠り、再び夢を見た。見ると、一本の葦に、よく実った七つの良い穂が出て来た。

41:23 すると、その後を追って、貧弱で、しなびた、東風に焼けた七つの穂が出て来た。

41:24 そして、そのしなびた穂が、あの七つの良い穂を呑み込んでしまった…。

41:25 ヨセフはファラオに言った。「ファラオの夢は一つです。神が、なさろうとしていることをファラオにお告げになったのです。

41:29 今すぐ、エジプト全土に七年間の大豊作が訪れようとしています。

41:30 その後、七年間の飢饉が起こり、エジプトの地で豊作のことはすべて忘れられます。飢饉が地を荒れ果てさせ、

41:31 この地の豊作は、後に来る飢饉のため、跡も分からなくなります。その飢饉が非常に激しいからです。

これはエジプトのファラオが見た夢の一部です。ここに「葦」と訳されている、聖書で最初のカーネがあります。イスラエルの子ヨセフはこの夢を解き明かし、このカーネには「飢饉が地を荒れ果てさせ」かつての繁栄の「跡も分からなく」なるほどの「非常に激しい」災いがもたらされる、という意味があると預言しました。ですからイエシュアの頭を打ったこの「葦の棒」には、終わりの時代に起こる激しい荒廃、大きな患難が起こることが表されているのです。しかしそれは文字通りの飢饉のような災害というよりもむしろ霊的な飢饉、荒廃、また霊的な墮落を意味しています。なぜなら次の「唾をかけ」と訳されたヤラク(קֶרֶן)のその本来の意味には、イスラエルの宿営、住まいである家から外に追い出され、締め出されるという意味があるからです。

民数記【新改訳 2017】

12:11 アロンはモーセに言った。「わが主よ。どうか、私たちが愚かにも陥ってしまった罪の罰を、私たちに負わせないでください。

12:12 どうか、彼女を、肉が半ば腐って母の胎から出て来る死人のようにしないでください。」

12:13 モーセは【主】に叫んだ。「神よ、どうか彼女を癒やしてください。」

12:14 しかし【主】はモーセに言われた。「もし彼女の父が彼女の顔に唾したら、彼女は七日間、恥をかかされることにならないか。彼女を七日間、宿営の外に締め出しておかなければならぬ。その後で彼女は戻る事ができる。」

これは神の御心に対して反感を持ち、つぶやいた女預言者ミリアムが神の怒りによってツアラアトに犯された時のものです。弟であるモーセのとりのなしの叫びに対して、神が答えられた御言葉の中に、聖書で最

初のヤーラク「唾した」があります。神は彼女を「宿営の外に締め出しておかなければならない」と仰せられました。やがて終わりの時代に現れる反キリストによってエルサレムの神殿は奪われ、汚され、獣の像を拝む場所へと変えられてしまいます。その時神殿で仕えていた祭司たちはもちろん、イスラエルの民、ユダヤ人たちはみなその家、国を追われ、まさに締め出されます。その霊的荒廃、背教とも呼ばれる霊的墮落が、やがて建てられるエルサレムの神殿とユダヤ人たちに起こることがこの「葦の棒」で打たれ「唾をかけ」られるイエシュアの姿には表されているのです。しかし「その後で彼女は戻ることができる」とあるように、その災いはイエシュアが地上に再臨され、追い散らされた先からイスラエルの民を再び戻されます。そして「ひざまずいて拝んだ」とあるように、彼らはイエシュアを崇め、聞き従うものとなるのです。

3. クレネ人シモン

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:20 彼らはイエスをからかってから、紫の衣を脱がせて、元の衣を着せた。それから、イエスを十字架につけるために連れ出した。

15:21 兵士たちは、通りかかったクレネ人シモンという人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。彼はアレクサンドロとルフォスの父で、田舎から来ていた。

イエシュアを「からかって」とありますが、ここに使われているヘブル語リーツ(קיל)は本来、それとはまったく異なる意味で、「通訳する(者)(創世記 42:23)」という意味の言葉でした。

創世記【新改訳 2017】

42:21 彼らは互いに言った。「まったく、われわれは弟のことで罰を受けているのだ。あれが、あわれみを求めたとき、その心の苦しみを見ながら、聞き入れなかった。それで、われわれはこんな苦しみにあっているのだ。」

42:22 ルベンが言った。「私はあの子に罪を犯すなど言ったではないか。それなのに、おまえたちは聞き入れなかった。だから今、彼の血の報いを受けているのだ。」

42:23 彼らは、ヨセフが聞いていることを知らなかった。ヨセフと兄弟たちの間には通訳がいたからである。

42:24 ヨセフは彼らから離れて、泣いた。それから彼らのところに戻って来て、彼らに語った。そして彼らの中からシメオンを捕らえて、彼らの目の前で彼を縛った。

これはエジプトの権力者となったイスラエルの子ヨセフと、その事実を知らず、かつて自分たちの弟であった彼を憎み、奴隷として売り飛ばした自分たちの罪を悔いているヨセフの兄弟たちとの一場面です。ここに聖書で最初のリーツがあります。ヨセフの兄弟たちは「われわれは…罰を受けているのだ」「血の報いを受けているのだ」と言い、ヨセフはそれを「聞いて」いた、というこの出来事は、やがてユダヤ人たちがイエシュアを十字架にかけて殺したことを悔やみ、その罪を認めるようになることを指し示した「型」です。そしてこの後ヨセフが自分の存在を明らかにし、兄弟たちと和解したように、イスラエルの民もまた悔い改め、イエシュアこそ真のメシアであることを知ってこれを受け入れるようになるのです。これこ

そが彼らイスラエルの民が神の所有の民としてきよめられた証し、しるしです。彼らが民族をあげてそのようになるならば、もはやきよめるための「祭壇」は必要ありません。イエシュアの「紫の衣を脱がせて、元の衣を着せた」という描写は、イスラエルに対する聖別の完了と、もはやイエシュアという存在が持ち運ばれていく、移動することなくとどまり続けること、イスラエルの中に住まわれる、という神のご計画が表されているのです。

そしてこのヨセフの箇所「シメオン」が捕らえられることと結びつくかのように、次に「クレネ人シモン」が登場します（シメオンもシモンもヘブル語では同じ綴りです）。彼は異邦人の地に住むユダヤ人でした。やがてイエシュアは地上に再臨され、追い散らされたすべてのイスラエルの民をご自分のみもと集められます。その有様はこの時の彼のように「無理やり」と言えるような、神の力業、荒業です。そして彼らは神に、イエシュアに聞き従う民となります。なぜなら「シメオン」また「シモン」という名は「神の歩まれる音、御声を聞く（創世記 3:8）」という意味のシャーマ(שמעון)がその語源であるからです。ですから突然現れて、たまたま偶然そこにいたように記されているシモンですが、そこには確かな神の選びが表されているのです。

4. 無理やり

私はこのシモンに対する「無理やり」という言葉に非常に共感というか実感を覚えます。なぜなら私もどちらかということのような方法でイエシュアを信じるに至ったからです。私の母は非常に熱心なクリスチャンで、私は幼いころから半強制的に、まさに「無理やり」教会に連れて行かれました。朝は早天祈祷会、夜は夜の祈祷会や伝道集会、土日はもちろん教会で、家に帰っても家庭礼拝があり、私はそれらにほとんど「無理やり」に参加させられていました。しかしそのうち次第に自分から行くようになり、やがて献身して今日にいたりますが…。しかし逆に母は、家族や親族に誰もクリスチャンがいないのに「無理やり」に、横で他の人に伝道しているクリスチャンの人の間に入っていったまさに「無理やり」に、そして周囲の反対、迫害を押し切って「無理やり」洗礼を受けた人です。結局のところクリスチャンはみな私か母のどちらかの、あるいは両方の「無理やり」によってイエシュアを信じるようになると思われるが、イエシュアに対するこれらの「無理やり」は、言い換えるならば、神の側の一方的な、主権による「選び」によるものです。神はイスラエルの、そして私たちの意思に関係なく、ただ一方的にお「選び」になったのです。まさにこうあるとおりです。

出エジプト記【新改訳 2017】

33:19 主は言われた。「わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、【主】の名であなたの前に宣言する。わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

ですから今はただこの神の「無理やり」に感謝します。神の前に罪人であり、死に定められていた者が自身の努力や能力によってではなく、神の御子のいのちという代償によって永遠のいのちに与る、何という「無理やり」、何という「選び」でしょうか。この神にすべての榮譽、栄光がとこしえにありますように。アーメン